

第2章 皇帝を否定した皇帝・毛沢東

1, 平等社会における皇帝

中国共産党は、1931年に江西省瑞金を首都とした中華ソビエト共和国臨時政府を設立し、1934年頃には、3600万人の人口を支配する巨大な勢力になっていた。これに対し、蒋介石は自ら最高司令官になり、100万人の軍を動員して、共産党政府の殲滅に乗り出した。

兵力が圧倒的に少ない紅軍は、支配地域を捨て、非戦闘員を含む15万人が、飢えと寒さの中、1年半をかけて1万2500キロを長征（退却）し、陝西省・延安に辿り着いたのは8000人に過ぎなかった。

この長征の過程で、コミンテルンの指令に追随するソ連派は批判され、毛沢東が指導権を握った。ソ連派は都市における労働者を軸としたブルジョワ革命を狙ったのに対し、毛沢東は、地主、富農等が所有する土地を全て没収した後、農民、兵士、元地主などに平等に分配し、生産物は平等に配分されるという方針を示した。

中国は、どの地域でも、内乱によって農地が荒らされ、飢えに苦しんでいた。紅軍には、多数の貧民が参加したので、夜盗の群れのように秩序が乱れていた。毛沢東は、長征の過程で革命兵士としてのモラルを叩き込み、反乱者を躊躇なく処刑した。延安に達した時には、紅軍は農地解放の意欲に燃え、軍の規律を守る精鋭から成る強力な軍隊に変わっていた。

毛沢東は紅軍の皇帝だった。長征の期間、兵士は飢えと疲労に苦しんだが、彼は何時も、彼のために独特に設計された竹製の担架に寝そべり、本を読んで移動した。周恩来を始めとする幹部は、全て無事に延安に着いたという。

延安は、蒋介石から共産党の支配地域として認められた。毛沢東は1937年から10年近く、ここで帝王のような生活を楽しんだ。延安は商業や文化の中心であり、共産党に憧れた美人・文化人が続々とやって来た。毛沢東はここに三つの堂々たる邸宅を持ち、毒殺を恐れて同じ料理人を使っていた。毛沢東の女性との付き合いは、延安では一層広くかつ深くなった。4人の子供を産んだ（全て死亡）妻と離婚し、江青と結婚した（ユン・チアン「マオ」講談社）。

中国共産党は、儒教を完全に否定した毛沢東思想の上に築かれたので、人民はすべて平等なはずであるが、実際には、儒教全盛期と同じように絶対的権力を握った皇帝が出現し、治める者と治められる者のモラルをはっきり区別され、かつ女性の権利を認めないという儒教の精神が、共産党の基礎思想になっていた。

2, 宇宙人のような解放軍

第二次大戦終了時には、日本軍との戦いと、国民党軍・共産党軍との激しい内戦によって、中国経済も民衆も疲労の極に達し、1945年10月には、一時、国共が合意し、蒋介石を最高指導者とする国家が生まれた。しかし、一年も経たないうちに、農地を解放する共産党軍が圧倒的に強くなり、内戦再開の後、1949年には中華人民共和国樹立された。

宇宙人のような兵士が、1947年に、上海に現れたという。ロベール・ギランは次のように報じた（「アジア特電1937～1985ー過激なる極東」平凡社）。「旧式な銃、旧式な機関銃、使い古したサンダル、草の汁で染めたようなぼやけた軍服。……一台のトラックも、自動車もなしに、この人達は何百キロ、おそらく何千キロを踏破してきたのだ。……盗みもせず、女も犯さぬ兵士、戦に勝っても略奪せず、住居に潜入せずに歩道で寝、住民がお茶を勧めても断り、電車に乗れば運賃を支払う」。上海人は、毛沢東が盗賊の群れから鍛え上げた共産党軍隊の規律に驚嘆した。

新政府は共産党や各種の地方の権力者の連合政権である。その理由は、最も重要な課題が土地改革であり、それは地主階層等の地方権力者との戦であるから、まず敵の力を弱めるため、政権内に抱え込むことが重要だったからだ。共産党は郷や村のレベルにまで土地委員会や民兵の組織を創り、筋金入りの党員をそのメンバーに送って、権力を固めた後、土地の国有化と配分を実施した。

土地改革は劉少奇の指導力と党員の活躍によって混乱なく進み、共産党に対する信頼が高まった。次に必要なのは、国民党時代に全国に広がっていた官僚主義と、それによって生み出された汚職の撲滅だった。国民党時代の上海は、汚職と腐敗で繁栄した国際都市だったので、秘密党員が潜伏し、密告が奨励され、1955年頃には、大量逮捕と大量公開処刑が実施された。売春、博打、麻薬、窃盗、強盗がウソのように街から消え、共産党によって正しい秩序が維持された。

ところで、その頃、米ソの対立が深まり、朝鮮戦争では、米軍は、仁川上陸によって劣勢を優勢に変え、鴨緑江にまで進撃した。中国では危機感が高まり、50万人の義勇軍を投入して、米軍を38度線まで押し戻した。武器が比較にならないほど劣っている中国軍が、戦死者で谷が埋まると、後続部隊がそこを渡って攻撃するという人海戦術によって米軍を破り、中国の国際的地位が高まった。

3, 思想の統一・生産の集団化

中国人の念願は、地主の搾取と外国の支配から逃れることだった。土地改革の結果、労働者・農民の政治的な力は飛躍的に高まり、民族資本家、富農、知識人等を指導する立場になった。また朝鮮戦争で、中国軍は世界最強のアメリカ軍を破った。毛沢東思想は中国全土に浸透し、服装も精神も統一された。

毛沢東スタイルの青い上着、青い生地ズボン、青い布地の庇がついた丸帽、女性も青

いズボンをはき、男性と区別が付かない。都会は青い人の群れで溢れ、長江中流における洪水防止の堰堤建設のような大工事の現場では、数万の「青い蟻」の群れが、一日3交代制で、同じ仕事を絶え間なく繰り返し働いていた。

全国何処へ行っても、「毛沢東万歳」、「中国共産党万歳」の文字が、民家の屋根の上や壁や、街の至るところにある立て看板に描かれ、労働や生活だけではなく、精神の集団化が深く広く進み、兵士も国民もすっかり毛沢東思想に染まっていた。

農業の集団化は1953年から始まった。農地改革の時には、農民は自分の土地が得られると思ったが、共産党政府は、それを取り上げて、集団所有にするつもりだ。当然激しい反対が予想された。毛沢東思想は永久に正しく、それによって、平等社会が確実に実現されるというPRが全国的に展開され、党員が監視役であり、密告を推奨した。

ソ連は農業の機械化に重点を置いて集団化を進めたが、中国は農民に対して、集団化への主体的行動を求めた。1953年から始まった農村合作社の規模は次第に大規模化し、自然村単位だった下級合作社は、1956年頃には行政村単位の高級合作社に変わった。

自然村には、血縁・地縁で結ばれ宗族が儒教の伝統的モラルに支えられ、助け合って生活している。ところが、行政単位の大きな村になると、多数の宗族が係わり、それは、小さな親戚付き合いの村に、大勢の他人が乗り込んで来たようなもので、村が混乱し、短期間では一体感を形成できない。1956年頃には、農民の生産意欲が低下し、強制割り当て量の供出に苦しみ、生活水準が低下した。

折から(1956年)、ソ連では、フルシチョフがスターリン独裁を全面的に批判した。それに応ずるように、中国共産党政治局会議は(1956年)、毛沢東独裁から集団指導制に変わることを決議した。

1957年には「百花斉放・百家争鳴」運動が始まり、共産党外部の知識人に対して積極的に加わり、自由に共産党批判を発言するように働きかけ、政治参加、言論統制の撤廃、毛沢東思想の否定など、膨大な提案や批判が壁新聞や座談会で発表された。

毛沢東は、激しい批判に驚き前言を翻して反撃が始まった。「右派への仮借なき批判」の運動を開始して、1958年には、55万人が処分され、農村や中央アジアの強制収容所に送られた。「百花斉放・百家争鳴」運動は、結果的には、右派をあぶり出す手段になった。毛沢東は、徹底的な右派攻撃によって勢力が拡大すると、直ちに、フルシチョフの平和的戦略を激しく非難し、アメリカ帝国主義との戦争の必然性を強調して、国内では社会主義体制への移行を急いだ。

「アメリカとの戦いで、中国人が3億人生き残れば、世界は社会主義になる」という毛沢東の発言は、世界を驚かせ、1959年にはソ連は、中国に対する軍事技術供与協定を破棄した。中国は、アメリカ、ソ連を敵に回したので、重化学工業はソ連国境から遠い国内の4拠点に移され、北京市には、原爆に耐える地下官庁街が建設された。

4, 全国民を管理

毛沢東は、社会主義への移行期間の数十年と想定していたが、国際環境が緊迫したので、党の政治局拡大会議で、5年以内にイギリスを追い越すという「大躍進」政策（1958年から開始）を決定した。それは、農村合作社を社会主義社会の基礎単位である人民公社へ発展させると同時に、工業と農業、西洋式工法と伝統式工法の結合を目指した。1956年末には、殆ど全ての農家は人民公社に加わった。

人民公社は5000戸ほぼ2万人から成り、モデル的な公社では、家庭生活は廃止され、共同食堂で食事して、女性は家事労働から解放され、男女は同じ生産隊に編成され、武装民兵の指揮のもと、整然と列をつくって作業所に向い、子供や老人は、公社の保育所や養老施設で過ごすのである。

そこでは、儒教が前提としている血縁・地縁社会を完全に破壊して、毛沢東思想に基づく集団生産・集団生活が創られ、農業・文化・教育・軍事を統合した自給自足の新社会が形成されるはずだった。

歴代王朝が悩んだのは、社会の単位が宗族であって、無数の閉鎖的・伝統社会がバラバラに存在している国家を如何に統治するかという課題である。それを解決するため、家長を頂点とし、男系長子の子孫が家督を相続するという戸籍制度が創られ、儒教が普及して、国家統一の基礎にした。

共産党政権は、この伝統的な戸籍を利用して政権の基礎を築いた。まず都市では、穀物などの平等な配給を試み、農民が都市に移住すると、失業、インフラ不足等問題が激化するのので、都市戸籍と農村戸籍が区分され（1958年）、農民の都市への移住が不可能になった。次に職場や機関が「単位」になり、都市における社会保障制の基盤が形成されるとともに、党が職員を監視し易くなり、大きな職場では、小学校、社宅、食堂、通勤バスが付属施設になった。

また、出身、経歴、賞罰、外部評価など記載された档案制度がつくられ、この個人情報ファイルは職場の党委員会が保管し、本人が職場が変わる毎に、新しい職場の党委員会に移管された。

5, 人民公社の失敗・白猫黒猫論争

農民は、それぞれ特定の人民公社に属し、移動出来ない。毛沢東は、深く掘り、密植栽培を命じたが、肥料が不足し、穀物は育たなかった。ダム、灌漑用水、貯水池、運河等、巨大な施設が人力で建設されたが決壊事故が相継ぎ、また工期短縮のため浅く掘ったので船が通れない運河等、欠陥施設が多かった。農民には土木技術がなかった。その上、働いても、働かなくても、賃金が平等であるから、勤労意欲がでない。人民公社の「小型土法炉」は有名な失敗例であり、鉄鋼の年生産量を2倍にするため、農村に小型高炉が建設され、農民が熱心に働き、廃品だけではなく、日常使う鍋・釜までくず鉄として投入され、

30%以上は使用に耐えない低品質な鉄鋼が生産された。

役に立たない巨大なインフラの建設工事、生産性が低下する農法、非効率な工業生産などに大量な農民が動員されたので、農業生産量は大巾に低下した。しかし、人民公社の指導員は、档案制度があるから、出世を目指して事実を隠し、供出割当量を超える架空の収穫量を上部に報告したので、農民の供出量は過大になって、農民は日常の食料を失い、餓死者は最小で1500万人、最大で4000万人に達したという。毛沢東流の新社会創造は大失敗だった。

毛沢東は、1962年の中央拡大会議で批判され、党の指導権は、劉少奇、鄧小平等の実務派に移った。新指導部は、農業生産を刺戟するため、人民公社の土地を農家に配分して生産請負制を採用し、請負量を完成した後は、自由に農産物を生産し、自由な価格で販売できるという革新的政策を実施し、また、政府の農産物買い上げ価格を大巾に引き上げた。間もなく、農産物産出量が増加し、また、農家の需要に支えられて、工業製品も増加に転じた。

劉少奇、鄧小平を中心とした官僚機構が整備されるにつれて、毛沢東の権力は縮小し、中国経済は物質的欲望によって動く市場経済へ変わり、共同生産・共同生活の平等社会を建設するという毛沢東の夢は捨てられた。

毛沢東は中国人の人間改造を目指していた。新しい社会では、軍人は軍事・政治・文化を学び、副業として農作業をする。労働者は主として工業で働くが、軍事・政治・文化も学ぶ。農民は、農業の他に軍事・政治・文化を吸収する。学生や党幹部は仕事を分業化せず、自給自足的な生き方をする。そうした結果、精神労働と肉体労働、都会と農村は一体化して人間らしい社会が形成されるはずだ。これに対して、鄧小平は「白い猫でも、黒い猫でも、ネズミを捕るのが良い猫だ」と述べ、思想より実利を求めた。

6, 毛沢東の奪権闘争

権力闘争は、有力な派閥集団と連携することである。共産党本部では、軍とイデオロギー部門が重要だった。人民解放軍では、兵器の近代化よりも人民戦争論を重視した林彪が、毛沢東思想を支持し、小冊子「毛沢東語録」を全国に配布して、毛沢東を神聖化した。毛沢東は、これに応じて林彪を次期総統に決めたような態度を示した。イデオロギー部門では、「中央文化革命小組」が結成され、走資派（劉少奇・鄧小平等）批判を広く展開し、一流大学で学生に対し、利益重視のブルジョア思想を潰すための実力行使を呼びかけた。毛沢東もそれを支持したので、各地に紅衛兵が生まれ、プロレタリア文化大革命（文革）が始まった。

文革が凄まじいエネルギーを生んだのは、毛沢東崇拜が深まり、皇帝のような権威を備え、民衆は臣下のように平伏し、毛沢東の命令を天の指示のように受け取ったからだ。毛沢東は、彼が打倒しようとした古い中国の皇帝そのものになった。

その上、中国の権力構造には伝統的な出身血統主義が強く残っており、反右派闘争以降では、「良い階層の紅五類」と、「悪い階層の黒五類」に分けられ。差別された。「紅五類」は、労働者、革命幹部、革命軍人、革命遺族、農民の出身であり、「黒五類」は、旧地主、旧富農、反動分子、悪質分子、右派分子であり、出身や血統は本人が知らないうちに、档案記録に記載されており、就職、出世、結婚等に大きな影響を与えた。都市では、職場の「単位社会」も監視機構としての働きがあった。

紅衛兵は、実権派（劉少奇・鄧小平）の物資的な報酬によって、生産を増加させると言うブルジョア思想打倒を目指した。毛沢東の目的は、実権派を追放することにあるが、新政策が成功しているため、真正面から攻撃できない。そこで、政策的に無智な少年・青年を利用した。文革が全国に広がると、次第に「紅五類」と「黒五類」の階級闘争に発展し、それまで犬のように扱われていた多数派の「黒五類」は、特権階級の「紅五類」に反撃し、各地で、中央政府・地方政府の幹部を吊るしあげる集会を開き暴行を加えた。武器を使った紅・黒の戦いも発生し、文革を通して40万人が犠牲になった。ところで、実際には、誰が「紅」で誰が「黒」であるかはっきりしない場合が多かった。档案記録の激しい奪い合いが起こり、また密告が広がり、肉親間でも信頼が失われ、社会秩序はずたずたに切断された。

大躍進政策によって、経済が破綻して、雇用が減少している状況の中、文革が始まった。過剰になった1700万名の若者が農村に下放され、農村では都会の若者を食わせるだけの農地がないので、冷遇された。若者は、都会の実家に逃げ帰っても、戸籍と監視機構がしっかりしているため、すぐに追い返された。習近平も李克強も10歳台の時、約4年間農村で働いた。

文革を通じて、「紅五類」の代表とされた劉少奇は党籍を剥奪されて、軟禁状態に置かれ、鄧小平は党籍を維持できたが、南昌の小工場で3年間以上も働いた。劉少奇が築こうとした官僚システムは底辺から破壊され、劉少奇は間もなく死亡し、鄧小平は「長い島流し状態」になった。間もなく、毛沢東と後継者の林彪との関係が悪化し、林彪は毛沢東を暗殺し、クーデターを計画したが失敗し、モンゴル上空で墜落死した。文革で、毛沢東の威力は遺憾なく発揮されたが、結局、有能な側近を失い、彼の力が衰えた。

7, 毛沢東の業績

毛沢東は、まさに、秦の始皇帝以来の大皇帝であって、中国皇帝の伝統を生かし、民衆の絶大な支持を獲得した。その業績は大きすぎてまとめきれないが、特に、目立った点を要約すると次のようになる。

a, 人民解放軍の創造

規律が正しく、毛沢東思想に忠実な人民解放軍を創造した。解放軍は、欧米や日本が奪った権益を取り戻し、腐敗した国民党軍に勝ち、中国が歴史的に最大であった清の時代の

土地（台湾を除く）を取り戻した。

b, 政治・軍事大国

中国は政治大国の道を進み、まず朝鮮戦争を戦い、その後、米ソに両大国と政治的・外交的に対等に渡り合い、ソ連・インド・ベトナム等と武力衝突し、敗北を喫しなかった。1950年代中頃から、東南アジアの発展途上国による第三世界論を展開し、中国がその中軸に治まり、各国の共産党を支援して、冊封制度のような秩序づくりを始めた。中国はプライドを取り戻した。

c, 共同・平等社会

中国は、血縁・地縁社会であり、その社会のメンバーは一つ処を拠点として、細い網のように全国に広がり、福建省や広東省の宗族の網は東南アジアから、アメリカにまで伸びている。それらは完結した経済共同体であって、中国はバラバラな経済共同体の集合体に過ぎない。

毛沢東は、血縁・地縁社会を国家によって統一された共同生産・共同生活の平等な社会（人民公社）に変えようとして、村のレベルまで、共産党の権力と民兵組織を樹立し、国民を監視した。実現すべき目標は、中国型社会を世界に拡大することだった。欧米社会では、専ら生産効率を追って分業し、貧富の格差が拡大し、退廃した雰囲気満ちている。これと対称的な健康で平等な世界をつくることだった。「東風は西風を圧す」という毛沢東の言葉は、熱狂的な支持者を生み、日本でも一時期、毛沢東思想の信奉者が増えた。朝日新聞は、文革を「人間の再生」だと高く評価した。

d, 出身血統主義

中国は、出身血統主義が強く、政治的に高い地位についた人物が現れると、その一族郎党は良い血統に属し、社会的地位が上がり、尊敬され、豊かな生活が送れる。もし、一族郎党をそれ以前と同じ地位にとどまって置いたならば、高い地位についた人物は、冷血漢のように見られる。毛沢東は出身血統主義者ではないが、彭徳懐や劉少奇のような強敵を倒す時には、紅衛兵の出身血統主義思想を利用した。

毛沢東のような独裁者は、血統ではなく、実力と彼に対する忠誠心によって、配下を固めた。しかし、優遇した訳ではない。側近として働いた幹部は何れも不幸な晩年を過した。周恩来は癌に苦しみながら、次々に発せられる毛沢東の命令に従い、最後まで働き続けた。王明はソ連に逃れてそこで死を迎え、林彪は墜死した。

e, 孤独な独裁者と後継者不在

毛沢東は、結婚を繰り返し、沢山の愛人や子供を持っていたが、彼らに暖かく接した期間はごく僅かだった。晩年、毒殺を恐れて、彼の寝室に出入り自由なのは、毛沢東・専用列車のサービスと女優だった、2人の女性だけだった。

独裁者は孤独である。スターリンの臨終には医師がいなかった。どの医師も後に殺人罪によって処刑されることを恐れたという。

毛沢東の晩年には、優れた側近は消えていたので、凡庸な華国鋒が後継者になり、彼の

死後、彼が蛇蝎のように嫌った市場経済を主張する鄧小平が復活した。

出身血統主義はその後も生き残り、文革の時、冤罪を被った幹部は、何れも名誉回復して、もとの良い出身血統に戻った。

8, 独裁政権への回帰

孫文は欧米的な民主主義思想を持っていた。それを実現するにはロシアのような人民の蜂起が必要だと考え、民主主義から少し離れ、独裁を許す思想に変わった。

蒋介石は、西欧的な三権に、伝統的な官吏採用システム（考試）と官吏監察システム（監察）の二権を加えた独特な統治システムを創り、自ら、主席（国家元首）になり、皇帝への道を歩み出し、亡命先の台湾で独裁的な統治者になった。

毛沢東は共産党独裁のシステムを創り、党が三権と軍を握った。党は裁判官を任命し、党員が裁判を監視し、裁判は原則非公開である。人民解放軍は国家の軍隊ではなく、共産党の私兵である。大衆は皇帝に従順であり、皇帝が創造した毛沢東思想という宗教に従った。

こうして、党が軍を握っているので、党の分裂や内乱を伴う激しい権力闘争が発生しにくい。優れた独裁者が現れれば、経済発展を遂げる基盤が整った。大躍進政策、人民公社、文革によって、経済が低迷し、多くの人命が失われたが、鄧小平は、理想的な独裁的な統一政権を築き、見事な経済成長を実現した。